

《書き込み用プリント》

◎先生が、考えるためのヒントを言葉の横に書いておきました。それをてがかりにして、自分の読みを行間や、下のらんに書き込みなさい。

◎みんなでもっとくわしく考えてみたい問題も見つけましょう。

「井戸」 千葉県三

あしはら おか
芦原の小学校は、丘の上にあつたから、井戸がずいぶん深かつた。

おもて けん い
の面まで、十間ちかくあると云つた。 (二間は1.8mだから18mくらい)

なせのぞくのだらう
ふたがないので、お掃除の水を汲むたんびに、だれでもちよつとのぞいて見た。

この井戸の中を見たらどんな感じがするだらう
あかつち かへ つつ
大きな遠目鏡でものぞくように、赤土の壁が、丸い筒になつて、うすとおめがね(望遠鏡のこと)

せい き
暗い地の底に消えこんでいた。

この水を頭にうかべてみよう。どんな感じが
ほん
そして、はるか下の方に、小さい、円い、お盆のような水が、つめた
く光つて見えていた。

うし どうしてだらう。
丑は、三日目ごとにまわってくる、掃除当番が、いやでいやでしよ

うがなかつた。

く
そのたんびに、水汲みをさせられるからだ。丑は、力が強いかわりに
ぶきよう
不器用な子どもだつた。
(手先でするしごとがへたなこと。ぶきうちよ)

ろつか
丑がいかげんにしているからだらうか。
丑のふいた廊下は、しまになつて、ちつともきれいに光らないし、丑
なら つくえ いす
の並べた机や椅子はふしぎなほど、きつとゆがんでいた。

丑のやつたお掃除のあとは、見まわりにきた先生に、いつもやり直しをさせられた。

それで、ほかの当番がいやがって、とうとう丑を水汲み専門の役目に

なぜ水汲み専門にしたのだろう やくめ

せんもん

(そのしごとだけうけもつ)

してしまつたのだ。

はじめの二三ばいは、いせいよく、車井戸のつるべをくりおろして

くるまいせ

(かっしやをつかって水をくむ井戸)

行くが、五はい六ばいとなると、息がきれて、腕がしびれて、一つ汲

いき

うで

く

(いきをするのがくるしい)

むのに、幾度も中休みしなければならなかつた。

いくど なかやす

水くみしている丑をみんなはどんな気持ちで見ているだろう

はなじる

「丑、なんしてんだ。井戸んなかさ、鼻汁たらすんじゃねえぞ。」

なぜ放りだすのだろうか？いそがしいからか

こんなことをいいいい、ほかの当番は、からのバケツを放りだして

ほう

丑の汲んだバケツを運んで行つた。

く

はこ

丑は、たれかかった鼻汁を袖口でひっこすつて、フウとためいきをつ

はなじる

そでぐち

どんな気持ちなのか。

いて、さもたいぎそうにまたガラガラとつるべをくりおろすのだった

(するのがめんどうなようす)

長い梅雨が、そろそろ晴れかかつて、学校の裏の松林では、かえり

つゆ

は

うら まつばやし

たてのあぶらげみがなきはじめた。そのころのある日、だれかが井戸
のなかに、何か落っこつてるといいだした。

「しゃつぽみてえだな。」

(ほうし)

どんな顔で話しあっているだろうか。

「おら、木の根っこだと思ふな。」

ね

「猫っ子かもしんね。」

ねこ

「猫っ子よりやおつきいから、犬だんべ。」

よく、眼をこらしてのぞいて見ると、なるほど、すみっこの、赤土

め なせ？

(目をひたつたかたにあらぬあつちのこ)

の壁のきわに、なにかうすぐろいかたまりが浮いている。

かえ

見ている者はどんな気持ちになるだろう

(そは ふち)

「この水あ、はあ飲めねえぞ。」

の

「おら、知んねで、けきものんだんだ。きびわりいなあ。」

(きみがわるいなあ)

みんな井戸のまわりにたかって、ガヤガヤやっていた。

(おおぜいがひとつのところにあつまる)

そこへ、先生が出てきた。

先生も、のぞいて見たが、何だかはつきりわからないらしかった。

近くには井戸がないし、悪いものだったら、少しも早くだしてしまわ

なければならなかった。

先生はのぞきながら何を考えていただろう。

先生は、しばらくのぞいてから、まわりに集まっている生徒の方を

せいと

ふりむいて、

この時の先生の気持ちは？

「だれか、はいつて見るもんはないか。」

といった。

この時のみんなの心の中は？

みんな、顔を見合わせてだまっていた。

「つるべき、しつかりつかまって行けば、あぶないことはない。そろ

そろおろしてやつかな。」

先生の気持ちは？ みんなの気持ちは？

先生は、また、そう相談するようにいって、みんなを見まわした。

そうたん

すると、ひとりが、

なぜ丑の名前を出したのか。

「先生！丑がいいや！」

なぜさげんでいうのか。

とさげんだ。

なぜ、丑がいいのか。

「そだ、丑がいい。」

とまたひとりいった。

「丑あ、こないだ家の井戸ざらいつときも 中さはいったんだもん。」

(井戸のそだ)

丑は、みんなのうしろの方に立っていたが、背が高いので、青鼻汁をたらした、まののびた顔だけが、みんなの上に出ていた。

(じ)ことなくしまりのない顔

先生の眼が、丑の顔へ向くと、丑はあわてて横をむいて、

「おら、やだよ！」

なぜ、大声でいわないのか。

とつぶやいた。

けれどだれにも聞こえなかった。先生にも、むろん聞こえなかった。

「そんじゃ、丑松に、ひとつ勇気をだして、はいつてもらおうとするか

な。」

先生は丑の顔を見て何を思っているのだろう。

先生は、うす笑いをしながら、ジツと丑を見つめていった。

(声をたてずにかすかにわらう。人をばかにしようなんかんじのわらい)

「ホラ、お前がへえんだと。したくしろよ、丑！」

「はやく、先生ととこさいげよ。」

この時のみんなの思いは？

まわりにいた子どもは、ぐずぐずしている丑をつかまえて、むりや

丑はなぜ何も言わなかったのか。

り前へおし出した。丑は、何かいいたげに、口を動かしていたが、と

うとう何も云わなかった。

きもの

先生は、丑の着物をぬがせて、運動シャツ一枚にした。ほかの子も

なぜ、こんな世話をしやるのだろう。

帯をしめてやったり、ボタンをとめてやったりした。

おび

はながみ

先生がポケットから鼻紙を出して、丑に、

はなじる

「鼻汁をかめ！」

わた

何がおかしいのか。

と渡したので、みんなクスクス笑った。

あそ

つるべのなわに、太い麻なわがもう一本むすびつけられた。先生の

れっ

さしずで、大きい子どもたちは、一列になってそれにつかまった。

まもなく、丑は、寒なせうそうな顔をして、井戸側がわのぼに上って、先生に助け

られて、つるべにまたがった。

「しっかりつかまっているんだぞ。いいか、いいか。」

先生は念ねんをおして手をはなした。

(まぢがいがないように、もういちどあいてにちゅういする。)

つるべは、宙ちゆううに浮いて、それから、そろそろ井戸の中におりはじめた。

丑の、頭がかくれて、すがっている手首てくびがかくれて、とうとう麻あさなわ

だけになった。

麻なわが、こまかくふるえながらさがって行った。

丑は、二間けんおり、三間けんおりて行った。

あたりは、へんにうすらつめたくて、シーンとしていた。

(なんとなくつめたい)

先生だの、みんなの声が、遠いところからひびいてくるようだった。

丑は、だんだん大たんなせうになってきた。

(ゆうきがあって、おそれないようす)

これを見たときの丑の気持ちはどうだっただろう
上を見上げると、ポツカリと、おてんとうさまのように円い、明るい

空が見えて、そこから、三つ四つ、小さい顔のぞいていた。

つるべは、早くついてほしいのか、そうでもないのか、
ゆるゆると下へおりて行った。
とじ

そして、上の円い空は、ずんずんちいさくなつて行った。

丑は、なんだか、じぶんが下へおりるのではなくて、高いところへ
どうしてこんな気分になるのだろう、

あがって行くのだというような気がしてきた。

「やつら、くやしけら、きて見ろ！いばったって、ここまでこられめ

が！やあい！」

丑は、そう心の中でどなっていた。

ピシヤリと、つるべが水にふれた。

この時の丑の思いは？
底についたのだ。

丑は、ハツとして、
なぜ、ハツとしたのか。

「よおし！」

自分の声をどんな気持ちで聞いているのか。
と大声でどなった。声は、うつろの壁にひびいて、ゆかいそうに上へ

（なかみがない。からっぽ）
消えて行った。

手をのばして、落ちているものを引きよせて見ると、それは、つづ

れた古いフットボールの皮だった。
かわ

「なんだ！何がおっこちてたんだ！」

上からだれかきいた。

「フン。」

丑は何を笑っているのか
丑は鼻の先で笑って、口に出してつづやいた。

「知りたけら、自分でおりて来て見っといいや！」

つづいて、先生の声が聞こえた。

「丑松！なんだった……！」

なぜ、そんなうそを言ったのだろう。
「死んだねこっ子でやんす！」

丑は、いじ悪くこういった。

「そりやいかん！早く、つるべっ中さ入れて引きあげろ。」

Vertical dashed lines for writing practice.

「きたねえから、おら、やだなあ！」

丑は、さもほんたらしく、こういって手をひっこませた。

「せっかくおりたんじやないか。がまんして、持ってこう！いいか！」

先生が、たのむようにまたいった。

「猫っ子だと！」

「どうして、また落っこったんべ。」

「きっと、こうとうか高等科の生徒が、せいとぶちこんだんかもしんねな！」

(むかし、小学校と中学校のあいだにあった。)

「くさってんべな、きっと！」

いと ぼた井戸端で話す、そんな声がきれぎれに聞こえてきた。

この時の丑の気持ちとは？丑は、ニヤニヤ笑って、フットボールの皮をきたなそうにつま

みあ

げると、それを足の下のつるべにぶちこんだ

つなは、またそろそろひき上げられた。

丑が口笛を吹くほどにも明るいすがたになったのはなぜだろう。

丑は、近づいてくる頭の上の円い光を見上げながら、くちがえ口笛をふ

きぶ

はき上って行った。